

南方

北ボルネオの戦闘

神奈川県 森田六朗

私は昭和十七年以降、現在のマレーシア連邦国サラワク州のボルネオ島の北西部にあったイギリス人の経営する製材工場の経営を管理していました。そしてこの地で丸二年二カ月、熱帯樹林の実地研究と五〇〇人余の従業員と共に、作戦命令でくる軍事施設構築用の資材の生産を行っていました。

昭和十九年十月、戦雲が急迫するに伴い、私も現地召集となり、北ボルネオ最高峰キナバル山、標高四一〇一メートルの山麓ラウナ高原で入隊し、初年兵教育

を受ける身となりました。

この時現地入隊した者は、南北ボルネオ島全域から召集された比較的若年層の軍属、燃料廠技術者、農業関係者、日本企業の社員たち、総数七五〇人余で、現地「灘軍」に編成され、初年兵教育三カ月を経て各部隊に配属され、最前線に出ることとなりました。

この部隊たちは、ほとんどインテリと称される者たちであり、決して身体の頑強な戦闘要員となり得る者ではなかったのです。それがその後のジャングルの行軍・踏破のために戦わずして生じた大きな犠牲の要因でもありました。

私の所属は南方派遣軍第三十七軍灘独立歩兵第五三大隊で、二〇〇〇キロに及ぶジャングルを踏破し、マリアアに罹るなど地獄のような死線を突破し生還し

たのです。かような体験を経て終戦となり、懐かしい祖国日本に辿り着くことができました。

当時ボルネオ、マラッカ諸島及び西部ニューギニア方面に対する大東亜戦争開戦時の最大の作戦の目標は、重油の資源地帯という地理的戦略的価値に基づいたものでした。従って緒戦のマレー及びフィリピンの攻略作戦は、ボルネオ攻略の前駆戦として展開・実施されたものです。そしてこのボルネオ油田地帯の攻略・確保の成否は実にこの大戦の全体の勝敗を左右する鍵であったのです。

そのため連合軍の兵力が増強される前に、速やかにこれを獲得する必要がある、我が軍は第十二駆逐戦隊を基幹とする護衛船団をもって陸軍約三個大隊と、横須賀第二特別陸戦隊とで北ボルネオ地区のミリ、クチン方面を攻略することとなったのです。

これらの部隊は昭和十六年十二月十六日にミリを、同月二十五日にはクチンを占領し、同二十二日には第二十二航空戦隊をミリ飛行場に進出させました。さら

に翌十七年一月月上旬には第四水雷戦隊を主力とする護衛船団をもって陸軍約三個大隊及び呉第二特別陸戦隊をタラカン島に輸送し、一月十一日払暁に上陸、同十六日には台南航空隊の一部が、また二十五日までは第二十三航空戦隊司令部及び台南航空隊の主力が進出を完了しています。

爾来、南ボルネオ方面は我が海軍の管轄下に置かれ、昭和十九年春の連合軍の反攻が開始されるまでは占領体制が保持されてきました。

このような経緯と状況下で、昭和十九年九月、ボルネオ守備隊が改編され、第七軍が編成され、昭和十九年十月現地召集された私どもは、灘独立歩兵第五三大隊に加えられたのです。

当時の兵力編成の概要は次の通りです。

独立混成第五十六旅団歩兵第五大隊 タワオ

独立混成第二十五連隊第二大隊 サンダカン

独立歩兵第五四大隊（大隊部隊） サンダカン

独立混成第二十五連隊第二大隊 タウイタウイ島

独立歩兵第四三二大隊

クダット

独立歩兵第五三三大隊

ミリ

独立混成第七十一旅団（編成未完）

クチン

独立歩兵第四四大隊

タラカン

独立歩兵第四五五大隊

タラカン

これらの部隊は昭和二十年一月、南方総軍の命令によって配備の重点をボルネオ西海岸に移動させることとなり、独立混成第五十六旅団歩兵第五大隊、独立混成第二十五連隊第二大隊及び独立混成第二十五連隊第一大隊の三個大隊がこの移動部隊となりました。

私は当時すでに、ボルネオ生活を二年以上体験し、現地の言葉も十分体得し、風俗習慣まで修得していたためか、一期の検閲が終わり、教育期間が終了して配属されたのは灘軍司令部で、後方勤務となり司令部のあるアピに到着しました。しかし、その夜マラリア熱帯熱となり、第十一野戦病院に収容されました。十三日に及ぶ意識不明の高熱から回復して、一カ月後には原隊復帰できるようになりました。

そのころ原隊は転進命令を受けてブルネイに渡る直前で、その原隊追及となったのです。その距離は五〇キロぐらい、病後の体で軽便鉄道の線路上を昼夜を分かつぎ歩き通し、数日後にはキマニス鉄橋付近でついに原隊復帰を達成しました。

その後、部隊の先遣隊に加えられ、ブルネイ、ミリと油田地帯を走破し、ピンツルまでの七〇日、二〇〇キロに及ぶ海岸線の転進作戦を体験することになりました。

この南方軍の命令による東海岸配備部隊の西海岸への転進は、昭和二十年一月中旬から行動を開始し、二月下旬まで行われました。この転進は西海岸方面が連合軍により海上交通を遮断されたために海上機動を断念し、北ボルネオ中部の標高二〇〇〇メートル以上の背稜山脈を横断し五〇〇キロにわたる峻険な山岳地帯を通過する陸路行軍でした。

当時は既に雨季で降雨と河川の増水に悩まされ、糧秣は不足し、飢餓と疫病のために多くの兵員が消耗し

ました。また、転進部隊の先頭は二月下旬に西海岸のゼッセルトン付近に到着しましたが、後続兵員はそれより遅く、六月上旬に連合軍が上陸するまでの間に目的地に到着できた兵員は全兵力の半分にすぎなかったのです。また、その到着した兵隊は疲労とマラリアのためとても戦闘には耐えられず、兵器・資材の携行も減少しており、その戦力は極めて微々たるものでした。

このような状態でも、東ボルネオ東海岸より転進した各部隊は昭和二十年六月下旬以降逐次到着し、在来部隊と共にゼッセルトン、ポーホード、ラブアン島ブルネイ、ミリ付近の防備強化に専念しました。

この方面は六月以降連日、連合軍のB24数十機の爆撃を受けるなど、連合軍の航空勢力は日増しに強大となつていきました。六月七日には船団を護衛した連合軍艦船約七〇隻がラブアン島及びムアラ付近に現れ、連日猛烈な艦砲射撃を行ってきました。そして六月九日、ムアラ海岸に一部の兵力が上陸しましたが、我が軍の猛烈な反撃によりこれを撃退したものの、翌六月

十日には早朝より優勢な連合軍はラブアン島に、同夕刻にはムアラ海岸全域に渡り上陸を開始しました。戦闘は熾烈を極めたものの我が軍は優勢な連合軍に逐次圧倒されて、第一線の各部隊は甚大な損害を受けたのです。

ミリ地区においては、連合軍は六月十日頃から艦砲射撃を行うと共に、同日、ミリ北方のルトン海岸に上陸してきました。同地区の守備隊である我が独立歩兵第五五三大隊は勇戦、極力その進出を阻止すべく敢闘しましたが、遂にその海岸線の保持が困難となり、同部隊主力はミリ東地区を確保したまま終戦を迎えることになりました。

このように連合軍は、ボルネオ油田地域奪還作戦の寸前であり、第五五三大隊本部はミリ地区において迎撃戦闘の渦中に入り、ついに復員するまでその消息を知ることができませんでした。

そして死地といえる戦場となった二〇〇〇キロの広範な油田地帯を含む地域は彼我攻防の地帯であり、ま

た犠牲者も膨大な数に上った戦場でもありませんでした。しかも先遣隊となった最前線での苦痛はその極限に達し、そこには部隊としてのまとまった統制ある行動はできず、ただ黙々と機械的な歩行を続ける苦悩の無言の行進でした。正にサバイバルの、ただ行進するといふだけの戦いでした。

【解説】

体験記執筆者の森田氏は戦前・戦中にボルネオで企業を経営し、戦争が激しくなった昭和十九年現地で召集され、北ボルネオの防衛に労苦の体験をされた。

戦後、一九六二年マレーシア連邦国の独立を契機に、再びボルネオ島の森林調査の社命を帯び渡航されるが、その調査の中で、線香と数珠を持ち、忘れ難い北ボルネオの山河、サラワク州各地への旅行に単身出発し、幾多の戦友が眠るかの地を回り回向を重ねられた。

そして現地に眠る幾多の「英霊の祖国への帰還を」という願望から、厚生省援護局との関係も深まり、昭

和四十九年七月にはキナバル会（戦友会）の方々を案内し、香港、コタキナバル、ミリ、クチンなどの巡拝を行い帰国されている。

森田氏は、キナバル会の事務局長として、毎年全国各地において大会を催し、亡き戦友を偲び、そしてお互いの親睦を温め合っている。その回数もすでに数十回に達しているという。

昭和五十一年には再度戦友会二十数人とともに現地を巡拝するほか、毎年二、三回は社用で東南アジア地域への海外出張があり、その都度、現地の人々との交流も行っている。

一時病に倒れたがようやく病から解放されて、ボルネオの遺骨収集という大役を戦友団体から申し込まれることとなり、一方、厚生省のこの地区の遺骨収集事業はこの期をもって終了すると聞かされ、ついに意を決され、昭和五十八年十月十九日から十一月十七日の一カ月にわたる厚生省派遣第四次北ボルネオ地区遺骨収集の戦友代表として参加されている。

森田氏は独立歩兵第五三大隊に属され、北ボルネオの西海岸への転進作戦を体験されており、その模様は体験記中に詳述されているが、戦没者の大部分は西海岸における山岳地帯で糧秣の欠乏による飢餓と疾病によるものである。なお、ゼッセルトン、ポーホード、テノム間は終戦後の死亡者も多く、各々集結地付近において埋葬されているという。

日本政府は昭和三十一年七月及び昭和四十五年十一月十七日から十二月十五日の間と昭和五十年十月二十八日から十一月十六日までの間、さらに昭和五十八年十月二十七日から十一月十六日の間、この地域の遺骨収集と現地追悼行事を実施している。

遺骨収集の状況

第一次	昭和三十一年度	ゼッセルトン	一〇〇柱
		ラブアン	五二二柱
		ブルネイ	三八柱
		ミリ	四柱

計 六六四柱

第二次 昭和四十五年度

コタキナバル地区	二〇二柱
ラブアン地区	三〇三柱
ブルネイ地区	一五〇柱
ミリ地区	一〇〇柱
テノム地区	三〇〇柱
ラハタド地区	三〇柱
計	一〇八五柱

第三次 昭和五十年度

テノム地区	一四七柱
タワオ地区	一七〇柱
ミリ地区	九柱
計	三二六柱

第四次 昭和五十八年度

テノム地区	一七柱
総計	二〇九二柱

第三十七軍独立第五三大隊の総人員は九五一人、

うち帰還人員六三九人、戦没者二〇三人となっている。

戦争明暗体験記

京都府 矢野 美三雄

昭和十七年三月四日、私等の経理部の乗船した「東京丸（六四七トン）」は静かにフィリピン群島のミンダナオ島のダバオへ入港した。

生まれて初めてみる熱帯の島、物の本で少しは予備知識を養い、また船中で通訳等の南進商社員の話で想像の域であった夢の国南方の島は、群青の山々が濃紺の湾に映り、えも言われぬ風情であって、戦場へ赴く私等は一時的に戦争を忘れられた。

軍の建前上、私等末端の雇員はさておき、士官や高等文官等のえら（偉）さんはいち早くランチで御上陸になった。この分では停泊中に上陸のチャンスはいつのことやら。やっと三日目ぐらいで上陸の順番が来た。

上陸場は港の棧橋で、そこは日本軍攻撃で大分破壊されていたが、それでも長途の疲れを癒すために私等を迎えてくれた。それにありがたいことがもう一つあった。

ダバオ経理部の波止場でのバナナの接待で、遠来の私等にたらふく召し上がれと歓待してくれたことである。内地でも台湾バナナは口にしたが、産地で充分熟した果物の美味しさはひとしおで、若気も手伝い大いに賞味した。

上陸はやはり嬉しい。街路樹のアーチの下で色の黒い原住民がはだしで道路上に果物や現地産の細工物を並べて、何やら判らない言葉で客を呼んでいるのは、日本内地とあまり変わらない。

聞くところによると、日本軍が侵攻して来た時に、原住民のゲリラが在留邦人を襲い蛮刀を振るい虐殺をしたそうで、邦人居留民団が自警団を組織し自らを守っていた。これとて戦地戦場に見られる悲劇であると話し合った。